
大罪と日常風景

枷檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大罪と日常風景

【Nコード】

N7628E

【作者名】

枷檻

【あらすじ】

神と龍と悪魔と天使と妖精を虐殺し何となく世界に喧嘩を売った少女と、自分の家をこよなく愛する青年が織り成す、ほのぼの物語。

『世界が愉快でありますように』

嘆くなかれ、嘆くなかれ、嘆くなかれ。

封じられようとも、縛られようとも、閉じ込められようとも。

それは全て最高の舞台を創るための、準備にすぎない、用意にすぎない、言っなれば前口上。

その嘆きも恐怖も孤独も絶望も、世界に放たれるときにはきれいさっぱり忘れていよう。

陰謀がある、謀略がある、策略がある、計略がある　しかし、それは些細なことだ、舞台を盛り上げるいくばくかのスパイスと考えればいい。

まわりを見る、空を見上げる、隣を見る。どうだ、素晴らしいだろう？　何故だか、楽しいだろう？　なんとなく、愛おしいだろう？

理由は明瞭。世界が素晴らしいからだ。だからお前は今日も願うがいい。

世界が愉快でありますように　。

『楽しくなったら、生きていこう』

悲しいのなら、死ねばいい。

苦しいのなら、死ねばいい。

楽しくなったら、生きていこう。

チチチという雀の可愛らしい鳴き声、グルルという獣の雄々しい鳴き声、いつもと変わらぬ朝の光景だ。

カーテンをあけたその先には、均等にはえた黒白の髪のコントラストが可愛らしい、俺んちの『八分殺はちぶころしの大罪』が、地獄から送られた黒くて大きくて顔が三つあるワンころと壮絶な死闘を繰り広げていた。知らない見てない。俺は全力で目を反らす、カーテンを閉める。

一応、空間捻曲げて境界張ってあるから大丈夫だと思うが……。愛しき我が一軒家の心配をしながら、階段をトントンと降りていけば、

「歯車、腹が減ったため」

玄関に血塗れの馬鹿がいた。

「どうした歯車。腹が減ったため、腹が減ったため、腹が減ったため。一万年も断食してたのだからな、せめてこれからは一日五食プラス間食を含めた善き日々を送ると決めているのだぬ」

「肥えて子豚になるぞ。取り敢えず、その付着した液体を洗い流せ。

マイホームが汚れるだろう、マイスイートホームが」

「ふん、くだらない固執だぬ。妻である私以上に大事なものなど、この世界に存在しないということがまだ分からないかぬ。果報者め」

「いつ、妻になった。精々、ペットがいいところだろう。ほら、風呂まで抱っこしてやるから手を挙げる」

「ぬ」

脇に手をいれ抱き上げる。獣の血が服に着くが、まあフローリングの美しき輝きが損なわれるよりはマシだろう。ビバ、フローリングの魅力を引き出すワックス。

「しっかし、お前は相変わらずちっちゃいな」

「胸か？ さり気なく触って成長を確認するとは、なかなかやるぬ」

「違う！ 俺を変態にまつりあげる言動は止せ！ それじゃ、ただのセクハラ親父じゃねえか」

「ふ、歯車なら私もやぶさかではないがぬ」

話を通じないのは、生きてきた時代が違うからなのだろうか……。会話のキャッチボールがしたいと、切実に思う。

目的の風呂場に着いた。

「中で、その殺人現場帰りみたいな服も洗ってこい。俺は、後始末してくる」

「なんだ、一緒に入らないのかぬ？」

「シャンプーハットを使わなくなったらな」

「む……」

一万五歳のくせに……。

反論が無かったので、脱衣所を後にし凄惨な虐殺現場へ向かうため玄関から外に出て、庭とチャンネルを繋げる。これを怠ると、時空の狭間で挽き肉になってしまうので注意が必要だ。あの馬鹿は、平気で時空を越えてくるがな。

「まったく、お前もかわいそうに。百パー適わない相手とわかっていて、送られてくるんだから。あの世間知らずの小僧、俺が今度懲らしめてやるから成仏しろよ」

三つ首の上部分がどっか飛んでちゃった死骸に手を合わせ、せめて俺を恨みませんようにと死後の安寧を必死に祈る。なんて良い奴なんだろうか……俺。

つつがなく犬を火葬し天へと返した後、ついでにどっかからこつちを伺ってる奴の精神を少し蝕む禁術を使用しておく。半年くらい発狂するだけの、優しいタイプなので安心なのだ。

さて、今日も一日が始まる。黒白の髪と闇色の瞳、かつて神と龍と悪魔と天使と妖精を殲滅し、なんとなく世界に喧嘩を売った世界で一番罪深い、たなつきくゆり棚月玖百合との日常が。

ああ、なんて楽しい日々だ。

『ただいま』

天国の反対、樂園の反対、最高の反対　地獄。悪魔の住みかでもあり、罪を犯した罪人が裁かれる場所でもある。

そんな場所に、俺はやってきた。これというのも、学習能力があるのかと疑ってしまうほどに、毎朝送られてくる刺客の親玉のせいだ。あのくそガキ、ちよつと前に次送ってきたらげんこつだって、忠告しといてやったのに。俺の厚意を無駄にしゃがって。これは、もうぶん殴るしかないな。

枯れ木に囲まれた砂利の道を進めば、やがて昔の貴族みたいな屋敷が見えてくる。立派な塀に、頑丈そうな門、俺の家ほどじゃないがまあなかなかのものだ。俺の家ほどじゃないがな。

門に近づき手を添える。

『おや、齒車の兄さんじゃねえですかい。三ヶ月と少しぶりっすね、かわらず息災のご様子で結構なことっす。やっぱ、健康に変わるものはないすからね。金とかそんな一時的な物欲に目が眩み、体を顧みず働くことになんのいみがあるのやら。まったく、金に使われているっすよね』

「ああ、そうだなおれ等の価値観の根底には大体金額があるからな……じゃねえよ、何で門と真面目に議論しなくちゃいけないんだ。つーか、頭ん中ダイレクトに接触してくんな」

『そういわれましても、あっしには口やら目やらついてねえすから。まあ、人間の形をとることも可能っちゃ可能なんすけどね。そうす

るとセキュリティが甘くなるんすよ』

こいつは、地獄のセキュリティの全てを知り全てを把握する、かつて第一世代の神との攻防戦で、基本スペックが桁違いであるにもかかわらず、全ての攻撃を見事防ぎきった、最強の門だ。《新月の君》がいなかったにしても、多大なる功績といえるだろう。

「そうはいつでも、最近じゃそうそう仕掛けてくる奴らもいないだろうが」

『いやいやいや、やっぱ油断は禁物で大敵すから。気を緩めたときにやってくる、戦いつつーのはそういうもんすよ』

むづ、こいつ中々深いこといいやがる。千年も生きてると違うのか。

『ま、そんな物騒な話は置いといて。兄さん、今日は一体どんな御用で？ また、閻魔の坊っちゃんに何か』

「ん、ああ。あのくそガキまた刺客を送ってきてやがったんだよ。玖百合にはどんな化け物も無意味なことが、何で理解できないかなあのがキ。昨日は地獄の番犬、今日は喰鯨、俺の清々しい朝を赤く染めやがって」

後始末だつて、かなり大変なんだぞ。昔の癖かしらんが、玖百合の奴、ばらばらのぐちゃぐちゃに惨殺しやがるから、燃やし尽くすこともままならない。

俺がそう不満をぶつけると、門は首を傾げた。といっても、雰囲気だけ。

『そりゃ、おかしいですね。坊っちゃん、兄さんに尻叩きの刑に処されてからは一度も刺客なんざ送ってねえはずですけど。それに、坊っちゃんはどうも低級の魔物を送ってましたし。あれは、嬢ちゃんに付きつきりでかまってくれない兄さんに対する駄々みたいなもんつす。地獄の番犬や喰鯨なんていう、伝説級の化け物を送るなんざ考えられないつすよ』

「……確かに、そういわれればそうか。門、ここ二三日でこっち側に来た悪魔、全員分かるか？」

『いやー、そりゃ無理つすね。最近、観光気分ですつちに行く奴らが急増してるんすから。漏れは結構あるつす』

観光気分で悪魔が来んなよ。もっと、恐怖を運びにやってきたとか、そういういかにもな奴はいないのか。いや、いてもらっても困るんだけど。

何事も平和が一番だという結論に達した俺は、そつえばと門に問い掛ける。

「二日前から今日まで、何だか頭がいつちゃってんじゃねえかな？
つて奴はいなかったか？」

『ああ！ それならいたつすよ、確か《常闇とこやみ》の下つぱが、阿波おどりとドジョウ掬いを組み合わせたみたいな動きをしながら、そつちの世界から帰ってきたつす。流石にあれは忘れられないすね』

《常闇》。地獄の貴族が、刺客なんて送ってくるものか？ まあ、玖百合は世界の八割に憎まれてるから、絶対に有り得ないとはいえ

ないが。

ふん、まあいい。その事を大きくしなくても飽きるのを待てば、すぐに次の暇つぶしを見つける。貴族は所詮、金と時間を持って余した怠惰な連中。しばらくは、様子見だ。

「わかった。騒がせて悪かったな」

『坊っちゃんには会っていかないんすか？』

「あのガキ、会つと一日中ひつつきやがるからな、玖百合がキレる」
どっちもガキだが、被害の面では玖百合が勝る。家を荒らされるのだけは勘弁だ。

『そつすか。じゃあまた、兄さんがあつしを叩くときに』

「ああ、じゃあな」

ひらひら手を振って踵を返し、家と回線を繋げる。瞬間、景色がぐらりと歪み、歪みが直ると我が愛しきマイホームが眼前に出現する。

愛しの我が家の、すばらしき玄関扉を開け、荘厳なる世界に入り込む。

ただいま。

『どうだ、世界は楽しいだろう?』

『《真白》^{ましろ}よ、主は一体何を考えている。《八分殺しの大罪》を封印から解き放ち、何に利用するでもなく怠惰な日常を過ごすなど。あの世界に歯向かった例外を自由にすることがいかに危険なことか、主ほどの者ならば十二分に理解しておるであろうに』

「は、久しぶりに電話してきたから何かと思えば、そんなどうでもいいことかよ《渴望の果て》」

『どうでもいい!? 主は何を言っておる、我が眷属が絶滅寸前まで追い込まれたことを、主は見ていたであろう。いや、我が眷属だけではない、第一世代から第五世代まで無差別に蹂躪され虐殺されたあの時代。世界があやつを封印しなければ、我ですらこうして生きていられたか……』

「でも死んでねえだろ? だったらそれが運命だったんだよ。たとえ世界が玖百合を封じ込めなくても、おまえは生き延びられたさ。それに、第一世代の神どもがそこまでやらちまったのは、おまえが《新月の君》を瀕死の状態まで追い込んで、《空峰山》^{そらみねやま}を暴れ回ったってのも要因の一つだと思うがね」

『む……、確かにそれはあるが、我を解放したのは主だろう。……まさか、そこまで見越していたのか?』

「いや、そりゃ勘ぐりすぎってもんだぜ。玖百合はまったくのイレギュラー、俺がおまえを助けたのは いやこの言い方は恩着せがましいな、俺が解放の手助けをしたのは、誇り高き龍の長があるなどところで不様に朽ち果てていくのが、すげえ哀れでもつたいたい

とおもったからだ。おまえの存在は、もはや美に近い。その白い体も白い翼も白い炎も、全てが全て俺にとっちゃ芸術なんだよ」

『……やはり、主は観客だな。世界で唯一舞台に干渉できる観客。我ら役者は誰も主に反論できぬ。そういう意味では、あやつと主は近いところがあるな』

「ふん、やめてくれ。あんなわがまま娘と一緒にされるのは、すごく不愉快だ。俺はみんな楽しく生きられるよう、日々努力してる慈愛そのものみたいな男だぜ？ そうだその証明に、昔した質問をもう一度繰り返してやる。 どうだ、世界は楽しいだろう？」

『……それが、あやつを解放した理由というわけか』

「さてな」

『相変わらず、ひねくれたやつめが。まあいい、我はもう口だしはせぬ。だがしかし、我ら《七害》^{しちがい}は主の決定に異を唱えぬだろうが、あやつを憎むものは星の数ほどおるぞ。それ以外にも、あの膨大な力を利用しようと考える輩もいる。主はそれら全てをあやつからとおぎけることができるのか？』

「そんなこと、知ったこつちやねえな。復讐したいならすればいい、利用したいならすればいい、それも人生だ。俺はあいつが普通に生きることを望むなら、最低限協力してやる。衣食住の提供とかな。だが、俺がするのはそれだけ。好きに生きるから楽しいんだ、無理矢理日常に閉じ込めたって封印されてんのと変わらねえだろ。だから、もしあいつがまた世界に喧嘩売ったら、ぶっ殺してもいいぜ」

『そんなことは、絶対ないと確信しておくくせに』

「は、じゃあそろそろ切るぜ。また今度、おまえらの集落に遊びに行くからよ」

『うむ、歓迎しよう』

ぶちり。

『ここが質問です』

神を殺し龍を殺し悪魔を殺し天使を殺し妖精を殺した二つ目の例
外 《八分殺しの大罪》 棚月玖百合。

彼女の前では、神の《絶対優越権》も、龍の《炎罪》も、悪魔の《心遊び》も、天使の《繋ぎ羽つなばね》も、妖精の《宣言死》も、何もかもが意味を成さなかった。

世代別に世界が与えた特異の力を、彼女はまるで冗談のように風ぎ払い嘲笑い　そして虐殺を行った。

《七害しちがい》。 《新月の君》。

《渴望の果て》。

《墮落白色》。

《盲目善意》。

《無邪気な災厄》。

《真白》。

《原始の青》。

それら規格外の七つが、幾重の偶然と必然により参戦できず、それぞれの世代が混乱していたということも、原因の一つなのかもしれないが。だがしかし、第一世代から第五世代までを虐殺できるのは、後にも先にも彼女しかいなかっただろう。そう、まさに空前絶後にして自然災害的存在。

そして、圧倒的な違和感。

世代。世界が作り出した種族。それは七つ存在する。いや、《真白》という存在のために与えられた、第六世代という枠組みにおい

ては、ここでは省いておこう。だから、言つなれば彼女は六つの世代が存在するこの世界で、五つの世代を殺し回ったというわけだ。

なぜ、第七世代　人間は殺されなかったのだろうか？　無論、間接的な被害による死者の数は決して少ないわけではない。しかし、他と比べればそれはあまりにも微々たる数。全体の一割にもものぼらなかった。

神を殺した。

龍も殺した。

悪魔も殺した。

天使も殺した。

妖精も殺した。

人間は、殺さなかった。

さて、ではここで問題です。

彼女は一体、どの世代なのでしょう？

『えんまは、地獄のアイドルなのじゃ』

「おかえりなのじゃ、齒車よ」

くそガキがいた。罪色つみいろえんま、黄昏色の髪を後ろで括り、地獄のマグマよりも赤い目は爛々とした輝きを灯している。ちょうど、玖百合と同じくらいの背丈ではあるが、こちらも見かけどおりの年齢というわけじゃなく、多分二千歳は軽い。

「むう？ どうしたのじゃ、齒車。えんまが折角やってきたというのに、反応が薄いぞ」

「ガキ、お前どうやって俺んちの回線のパスコードを知ったんだ。月初めに変えてるから、前教えたのはもう使えないはずだぞ」

「ふん、みくびるでないぞ。えんまは、地獄に住む六百万の悪魔さん達を統制する、頑張り屋さんじゃ。玖百合が教えてくれたのだ」

あの馬鹿が……。初対面でいきなり、血で血を拭う最終決戦みたいなのを繰り広げやがったくせに。ある日突然仲良くなるなんて、番長がおまえら。高架下の熱き決闘、そして彼らは友となる。みたいな表題でも付けてやるうか。

いつのまにか電話番号の交換をすませていた二人、どうやら今となつてはいいメル友らしい。

とりあえず、玄関で顔を突き合わせているのも何なので、靴を脱ぎびゅーていふおーな輝きを放つフローリングの床を踏みしめる。やはり、ワックスをかけるとちがうな、ふふ。

「歯車ー！」

どん！ とフローリングとワックスの相乗効果に満足していた俺の腹部に、えんまが体当たりと類似する速度で抱きついた。

「何だ、ガキ。邪魔だ離れろ」

「ふん、えんまに会いに来てくれなかった歯車が悪いのじゃ。えんまは、いつ来てくれるのかとずっと待っていたというのに。えんまは淋しかったぞ。玫百合は玫百合で、今日も歯車は情熱的に愛を語るなどといいよるしの」

「アホか、俺が玫百合に語るのは朝昼晩の食事のメニューが主だ」

「朝は裸エプロン、昼はランダム、夜はお帰りなさいませご主人さまプレイというわけじゃな」

「全然ちげえよ！ 外見にそぐわないこと言ってるじゃねえ！ どこでこっちのいかかわしい文化を学びやがったためえは」

玫百合の奴か、あいつ変な知識ばっか飲み込み早いからな。封印されてた期間を省けば実質五歳だから、純粹っつーことなんだろうけど。

コアラのようにガキを腹に抱えながら、リビングに続く扉を開けるとソファに寝そべっていた玫百合が、首だけを動かしてこっちを振り向いた。

「おお、やっと帰ってきたぬ。今日のご飯は何だぬ？」

「てめえ、第一声がそれかよ」

「しょうがないぬ、歯車が私に断りもせずどこか行くのが悪いぬ。おかげで、お菓子の貯蓄がつかたぬ」

「な……！ こいつ、一日前に買っておいだの全部食いやがったのか。」

「……飯は、抜きだな」

「ぬ！？ ま、待つぬ！ そんな残酷な罰は聞いたことがないぬ、私のアイデンティティーは食べることなのだぬ」

「知るか。つーか、おいこらくそガキ、いつまでへばりついてやがる。いい加減離れる」

えんまの頭をわしづかみにして、ゆらゆらと前後左右に揺らす。

「や、なのじゃ。えんまは、今日一日このままなのじゃ。なんか、あつちで《常闇》じょうやみが反乱を起こしたみたいだけど、そんなの知ったことないのじゃ」

「緊急事態、発生してんじゃねえか。早く帰れ、早く」

地獄の御三家 《常闇》《暗犬》くろいぬ《死色》しじよく。その一角が反旗を翻すつてことは、結構なことだぞ。しかも、《常闇》のおっさんは《墮落白色》の時代から神々との戦いを経験してきた強者にして、軍国主義だからな。きつと、最近のほのぼの情勢に堪忍袋の尾が切れたんだろつ。分かる気がする……。

「あやつらが、幾らえんまに立ち向かおうと無駄なのじゃ。門がいる、他の御三家がいる。それに、えんまは地獄のアイドルだから、悪魔さんたちが頑張ってくれるのじゃ。心配ないのじゃ」

「そうだね、そうだね。えっちゃんはプリーティーなんだぬ。だから、えっちゃんと私のご飯を作るんだぬ」

「てめえら、よく分からねえときに団結しやがって。 ああ、もういい！ 地獄何ぞ知ったことが、飯作るぞ、飯」

「そうじゃ、歯車か地獄だったら断然歯車じゃ」

「そして、歯車かご飯だったら当然ご飯だね」

「……玖百合、飯抜き確定な」

「ぬー！？」

『覚悟の上だ』

赤い赤い空の下、枯れ木と砂利しかなかった古い地獄の面影を残す、地獄の王が住まう屋敷近くに老人が一人たたずんでいる。

艶のない白髪を顔が隠れる程度まで伸ばし、顔を隠す白髪の間から見える赤い瞳からはいまだ褪せぬ光がともっている。

屋敷を見る。周囲を見る。地面を見る。空を見る。地獄を思う。

《墮落白色》のもとで思うがまま力を奮った、あの頃の地獄。懐古、それは今を生きれぬ弱き者の逃避手段と嘲笑っていた。そんな時代が自分にもあったと老人は思う。だが違った。

人は過去に縛られる。

人は過去を捨てられない。

人は過去に縋りつく。

「わしにとって、過去こそ地獄」

争わない悪魔など、悪魔でなく。戦場でない地獄など、地獄でない。

ならば、どうする？

簡単だ。

争えばいい、戦場にすればいい。

老人は、その腰に差した一本の黒き刀を抜く。全てを塗り潰し全てを呑み込む漆黒の刀身、幾多の絶望と数多の惨劇を生み出した老人のたった一つの武器。

前方にたたずむ門はそれを察知し老人に忠告する。

『……《常闇》の爺さん、この屋敷に攻撃を仕掛けるってえことは、地獄を敵に回すってことっすよ?』

「ふん、最強の門か……久しいな。神々を相手取ったときは随分世話になったものだ。ああ、懐かしい懐かしい。しかし、だからといって俺の決意はかわらない。殺意が疼くのだ、戦場に身を委ねると本能が語り掛けるのだよ」

『爺さん……あんたが、今の地獄に不満を感じるの、まあ、同じ時代を生きてきたものとしては理解できるっす。でも、やっと訪れた平穏を壊すのは誰一人望んでねえっすよ。墮落が隠居したと同時に、戦火の時代も終わった。それは、事実っす』

「そんなことはない!!」

老人すらもどこかで認めてしまっている事実を振り払うように、黒い刀で何も無い空間を切り裂く。

「悪魔は望んでいるはずだ！ 血の匂いを！ 殺戮を！ 戦場を！
どれも欠けてはならぬ、平穏などに浸ってはならぬ!! 俺たちは赤い世界以外で満足するべきではない!!」

『それは、爺さんのエゴっすよ。第一、爺さんはわかっているんすか？』

「何が言いたい」

『坊っちゃんはまだまだ未熟っすが。墮落が認めて座を譲った唯一の悪魔、その力はちよっと計り知れないっす』

「ふん、あのようなガキなど封じ込める方法はいくらでも

『それに、坊っちゃんにはあの人がついてる。あの人には、齒向かわないほうがいい、相手にしようと思わないほうがいいっす。あの人は日常が好きっす、それを壊そうとする奴に手加減するとは考えられないっす。爺さん、今ならまだどうにか誤魔化せる範疇っす、どうにか我慢しちゃくれないすかね。多分、齒向かったが最後に廻ることすら許されないとっすよ』

あの人。世界が許した唯一無二の例外、異質で特殊な存在。

老人はそれを想像し、恐怖を思い出す。 けれども老人はもう止まらない。

「覚悟の上だ」

そう言って老人は、黒い刀を構え 振り下ろした。

『戦争には戦争を』

それは、呆気のない終わりだった。

それは、前触れのない終わりだった。

それは、兆候のない終わりだった。

あまりにも唐突で、あまりにも突然の。盛り上がりも山場も窮地も見せ場も何もない、プロローグとエピローグの間を抜いてしまったような味気ない終わり。物語としては零点のラスト。消化不良のカーテンコール。

老人を襲ったそれは、白い炎の柱だった。

葉も枝も木も砂も泥も砂利も岩も雲も空も赤い空も皮も肉も骨も心すらも焼き尽くして灰となす、どこまでも清らかで残酷で無慈悲な白い火炎。

こんなもの反則としかいいようがない。

子供の喧嘩に国家権力が介入してくるようなもの、羽虫の撃退に核兵器を使用するようなもの。

そういつたいいわゆる『あんまり』な光景を目の当たりにし茫然とするしかなかった門は、老人が立っていた場所の遥か上空から降りてくる、神々しくも恐ろしい存在の気配を察知する。

地獄の住民ではなく許可証を持たないものが入ろうとするならば、

門の障壁に引つ掛かり、問答無用で焼け落ち死ぬはずなのに。それは神々すらも退けた堅牢なる門が展開する障壁など、まるでないかのようにするりと地獄に入ってきた。

徐々に強まる威圧感圧迫感危機感。逃げてしまえばどんなに楽かと門は考える。自分に危害を加えることはないだろうと半ば確信していても、もはや門は本能が告げる脊髄反射に等しい恐怖信号を止められない。ただひたすら単純に、降下してくるその存在が怖かった。

しかし、それは着実に門へと近づいてくる。ばさりばさりと巨大な白い羽で空気を打ち付けながら下降し、灰色の塵と成り果てた独りの老人が反逆を宣言した場所へと降り立つ。

第一世代の神々ですら恐れおののき震え怯えた第二世代の長。その咆哮は世界を震わせ、白き翼は全ての空を踏破し、鋭利な牙は大地を噛み砕き、白き炎には燃やせぬものはない。世界の有害《七害》の一角。かつて封印された腹いせに《新月の君》をフルボッコにした白き龍、《渴望の果て》がそこにいた。

「私たちは死ぬ。絶対に、紛れもなく、嘘偽りなく、まごうことなく、私たちはいつか死ぬ。蹂躪されて死ぬのかもしれない。刺されて死ぬのかもしれない。殴られて死ぬのかもしれない。絞められて死ぬのかもしれない。貫かれて死ぬのかもしれない。切り裂かれて死ぬのかもしれない。抉られて死ぬのかもしれない。潰されて死ぬのかもしれない。偶然死ぬのかもしれない。必然死ぬのかもしれない。突然死ぬのかもしれない。しかし死に方など心底どうでもいいことだ。」

どんな死に方だろうと、どんな死に様だろうと、どんな死顔だろうと。結局私達は死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ。それはまるで枯葉が朽ちるように、水が流れるように、空気が汚れていくように、大地が震えるように、心臓が動くように、呼吸をするように、死にたくなるように泣きたくなるように消えなくなるように殺されたくなるように、世界が移ろうように。そう、私たちは死んでいくのだ。それを認めないわけにはいかない、それから目を逸らすわけにはいかない。死とは隣人で知人で友人で恋人で兄で姉で弟で妹で母で父で、限りなく果てしなく近しい存在なのだから。さて、では屁理屈を言ってみよう。私たちには死ぬ権利がある、それは逆を返せば、私たちには殺す権利もあるということだ。だってそうだろう、私たちは命という、一番大切に一番儂い宝を、自らの個という存在証明の根拠を、奪われるというのに奪うことができないなど、これは不条理というものだ。だから奪う奪える。蹂躪できる、凌辱できる、弄べる、刺せる、殴れる、絞めれる、貫ける、切り裂ける、抉れる、潰せる、偶発的に、必然的に、突拍子もなく、奪える奪える死なせられる殺せる。そう殺せる殺せる殺せる殺せる殺せる殺せる殺せるのだ。悪いことではない、許されないことではない、責められることではない、叱咤されることではない、怒られることではない、罰せられることではない。古き法典にも書かれている当然のことだ。戦争には戦争を、略奪には略奪を、侵略には侵略を、崩壊には崩壊を、苦痛には苦痛を、悲哀には悲哀を、憎悪には憎悪を、狂気には狂気を、狂喜には狂喜を、殺意には殺意を、絶望には絶望を死には死を。さてさてさてさて諸君、では聞こうか。私達《零鏡》^{かがみ}が何をすべきか。闘争か、戦争か、殺戮か、反逆か、はたまた織滅か。でもまあ、まずは取り敢えず、宣戦布告から始めよう」

『粗茶つすが』

地獄の門はお茶を入れていた。

もちろん今は人型なので手もあるし足もある。性別はプログラムに組み込まれていないので、決まっているわけではないが。歯車にチンピラが似合うといわれたその日から、門はポロシャツにオールバックがスタンダードとなっていた。

地獄の警備が薄くなるので、ほとんど人型になどならないが。《七害》の一角、しかも神族をも遙かに凌ぐ白き龍がいるとなっては、どんな力自慢も攻めてはこないだろうという確信に近い予測のもと、門は今の姿となっている。

蟻がライオンに適うと思わないように、もはや土俵が違うのだ。自然災害に立ち向かおうなんて誰が考えるものか。

「粗茶つすが」

ことりと置いて、相手を見やる。龍のままでは屋敷には入れないので、門と同じく人型になったそれは、言葉にするのが馬鹿馬鹿しくなるほど完成された芸術作品のようだった。

今はもうどこにもいないあの老人のくたびれた白髪とはまったく違い、肩の辺りまで伸びた髪は光を浴びているわけでもないのに眩しく感じられる。

繊細で臆気で憊気で、屋気楼のように不確かな存在感。けれども、そんなあやふやかな感覚のなかに門は確かな恐怖を感じる。何が怖い

のかわからない、全てが恐ろしいのだ。

だから、そんな相手が不機嫌そうな顔をしているとハラハラしてしまおう。

気紛れに滅ぼされないだろうか？　そういう、笑うことのできない、正面に座る龍にとってはいとも簡単にできるだろうことを考える。

「すまなかつたな」

「……はい？」

突然の謝罪に言葉を無くす門だが、龍は気にせず続ける。

「本来ならば同族間の争いは遺恨を残さぬよう、その種族がかたをつけるべきことだ。我が介入することになんのプラスもない。……というのにあ奴は……！」

どんと手を突く　丸テーブルが粉状に姿をかえた。

割れるでも折れるでもなく、粉になった。

なんだこれ、物理法則反してないか？　普通にびびるチンピラ。なぜかお茶だけは死守している。

「……何が火葬してこいだ……我を一体なんだと思っているのか。まさか、地獄の御三家が反乱を起こしているなどと誰が予想できるというのだ……」

誰がそんな大それた事をと聞かない。この恐るべき相手に対してそんなふうに見えるのは、きつと世界にたった一人しかいなし、門はその人を知っている。世界の枠外に位置する、世界が最も寵愛する特例固体。彼らしい頼み方だだと門は思った。だがしかし、もうちょっとやんわりと言ってくればよかったのにともし思ってしまう。

そうすれば、まさか、神を喰らった神話上に決して出てくることのない伝説に、愚痴を聞かされることにはならなかっただろうに。

「悩みつてのは誰にでもあるもんなんすね……」

置き場所のなくなったお茶を一啜り。

チンピラが門に戻れたのは一時間後のことだった。

『運命は踏破するものだ』

「はい、どうもー。じゃあ『七害定例会議』始めますよー。とりあえず、いつもどおり司会進行を務めさせてもらう、第七世代代表『原始の青』です。いえー。……はいはい、いつもどおりノリの悪い人たちですね。閑話休題、閑話休題。あー、いいですか皆さん。もう分かっていると承知ですが、ちゃんと通り名で名乗ってくださいねー、本名とか言ったら超危ないんで。後、今回は『墮落白色』と『盲目善意』、あと『無邪気な災厄』さんらが無断欠席です。お三方には、罰として納豆シャワーを浴びてもらいます。じゃ、余談はこれくらいにして主題にはいりましょっか。まずは『新月の君』さんから『渴望の果て』さんに言いたいことがあるそうで、どうぞー」

「おいトカゲ！ お前、僕に無断で常闇トキヤミのくそじじい消したたる！あのじじい神属の間じゃ第一級指定の殺戮認定者なんだぞ、勝手に殺すなよ！」

『喧しいわ、わっぱ。相も変わらず、成長しない奴めが。我はトカゲでなく龍だと何回言えば分かるのだ。いつたい、その小さな頭には何がつまっておる』

「な、な、なんだとー！！ 無礼者め！ 僕は神様だぞ！ 世界が最初に作った最も欠落のない世代の長に、よくもそんな口が聞けるなトカゲ！」

『ふん、また食い荒らしてやるっか？』

「調子に乗ると絶滅させるぞ劣等種族」

『ふん、その劣等種族一匹に、七百五十九回も食われたのを忘れおったか。お主など、トカゲに食われる羽虫にも劣る』

「お、お前、僕を、神を羽虫だと!? 殺してやる! 否定してやる! 優越する! 世界よこのトカゲをむぎゆう!?!」

「ストップ。第一世代の能力を長のお前が軽がるしく使うな」

「むぎゆう! むぎゆうぎゆう!?!」

「うお!? てめつ、こらシヨタ神、指を噛むな指を!」

「ふはつ。『真白』つ、何で止めた! あとちよつとであのトカゲを、あのトカゲを」

「あのなあ、お前らの反則みたいな能力を、長のお前が使ったら世界に影響を与えすぎんだよ。それぐらい、お前だつてわかんだろうが。それに、シロはお前が宣言する暇なんて与えねえよ。昔もそうやって痛い目見てんだから、少しは懲りろよなシヨタ神」

「シヨタ言つな! しょうがないだろ!? 神様は成長しないんだよ! 神族なんて全部シヨタとロリなんだよ!」

「いや、話の重点はそこじゃないんだが……。……まあいいか、常闇の話も有耶無耶になったみたいだし……。おいシヨタ神、そんな興奮すんなつて。抱っこしてやるつか?」

「子供扱いすんなー!?!」

「お？ ……帰っちゃったよ。ほんとガキだなあ」

「はいはいー、じゃ、煩いのもいなくなったところで私の方から話があります」

『主……。あんなわっぱでも世界のほぼ全てを把握する力を持つているのだぞ』

「ばれなきや問題ないんですよ」

『したたかなものよ』

「で、話つてのは、もしかしたら『真白』さんは知ってるかもしれないませんが、『零鏡』つて団体のことです」

「おお知ってる知ってる。あの、クレイジーなよく分かんねえ奴らか。なんだっけ、一応宗教団体でいいんだっけか？」

「はい、その認識は間違つてないと思います。宗教団体『零鏡』。一人の教主と多くの信者で構成される、かなり偏つた思想をもつ奴らで、いま着実に規模を拡大しつつあります」

『ほう、束ねる者が一人だけとは珍しいものだな。人間とは群れるものと思つておうたが』

「そうなんですよねー。宗教団体なんて大体、上の方は肥えた豚の集まりつて相場が決まつてるんですけど、ここは本当に教主とそれ以外なんです。どの信者も平等。しかもその人たち全員が、教主に惚れ込んで漬かつて浸りまくつてる奴らばかりで……。潜入しても成果がまったくあがらない。困つた狂信集団です」

「ふむ……。しかしぬしよ、それらは『七害』が動く程のものなのか？ 人間がいくら集まろうと、神には勝てぬ龍にも勝てぬ、悪魔も天使も、純粹な腕力でやっとな妖精に届く種族……。いや待て、まさか『逆列』の」

「そう、その通りです。世代に背き、世界に逆らう、全てに反旗を翻すことを唯一の誓いとした、第七世代の汚点『反逆序列』。その第七位『僻太刀』^{ひがたち}が、教主の正体なんです」

「はー、まだ生き残ってたのかあいつら。確か十年くらい前にお前等で殲滅したんだろ？ 俺は参加しなかったからよくしらんけど」

「戦いにすらなりはしなかったがな。あれを人間の粹に収めることは憚られるが、我らには到底及びはしなかった。あやつらはただ逃げおつた。手を折られても、腹を抉られても、足をもがれても、我らに見向きもせず振り返りもせず、逃げ続けた。だがしかし、それ故に我らはあやつらをしとめ切れず、またこうしてその生き残りに煩わされる事になるうとは……」

「奢りが邪魔したか？ 上位世代。人間は弱いが、七つの世代の中で一番多いし、発展する早さも随一だ。神族なんざ、生まれたときから何も変わっちゃいねえし、お前ら龍も変化を好まない。地獄だつてえんまのガキに代替りしなかったら、まだ枯れ木と石と血の池しかない殺風景な場所だったろうな。人間は貪欲だぜ？ 手に入らないことを知りながら、全部を手に入れようとする。直ぐに老いるから不老を願い、直ぐに死ぬから不死を求めてきた。そしてやつらは、二十年も長く生きれるようになっちゃった。人間だけが世界を知らない、人間だけは世界を認めない。人間にとって世界は壊すもの、人間にとって運命は踏破するものだ。人間を見くびるな太古の

龍。前に勝ったから次も勝てるなんて考えじゃ、付け込まれるぞ？」

『……随分、人間を買っているようだな』

「そんなことねえよ。俺はお前も大好きだしな」

『……ふん』

「照れんなよー」

『照れとらん！』

「くく、長生きしてるくせに相変わらず分かりやすいやつだな。まあいいか。それで？」 『青』、その『零鏡』とやらは、俺たちがわざわざ出向かなくちゃいけないほどの規模なのか？」

「あ、いえいえー、でかいとはいってもほぼ一般人で構成されてますから、今回は報告だけしとこうかなーと」

「よし、分かった。じゃあ、取り敢えず今日はこれで解散としようぜ。あのシヨタ神もかまってやんねえと、拗ねて地獄をつぶしに行ったりするかもしれないからな。まったく、最近ガキに振り回されまくってる気がするぜ」

「ふふふ、捕まらないでくださいねー」

「何が言いたい……」

『ロリコンめが……』

「てめっ、おいこら聞こえてるぞその白トカゲ。第一玖百合は一万五歳だぞ、超年いつてるじゃねえか」

「……シヨタ」

「なっ……！？ 『青』お前もか！」

「ではまたー」

『我也帰る………』

「あっ、この、待ててめえら。変態を見るような目をやめろ、そしてそのまま帰ろうと 帰ったし！！！」

『子豚になるぞ』

「おい、玖百合くゆり。そんなところで、寝てんじゃねえ。本当に子豚になるぞ、お前」

おかずをめぐる激しいバトルや、チャンネルをめぐる熱き戦いやらがあつたものの、まあつつがなく終了した晩飯の後片付けをしながら、視界に入った玖百合を叱咤する。えんまのくそガキはそういった礼儀作法なんかの教育は行き届いているらしく、綺麗な姿勢で座っていた。あの屋敷の女中は厳しいからな……。

「ぬ、それを言うなら牛だぬ。だいたいレディにむかって太る太ると、まったく女心の分からない奴だぬ」

「しかしの、玖百合よ。実質五歳のおぬしは属に言う幼児体系。お腹が出やすいのではないか？」

「ぬ！？　そ、それは盲点だったぬ……。ぬー、そう言えば私の体は実質五歳……歯車はロリコン……。まあ、問題ないぬ。歯車はどんな私でも受けとめてくれると信じているぬ」

「歯車に対する全面的な信頼、うむ、立派なのじゃ」

「全然、立派じゃねえよ！　玖百合、てめえ言葉の間に不穏な単語を挟むな。ご近所に広まったらどうする、汚物を見るような目で見られたら多分立ち直れないぞ俺。いっておくけどな、サディストは打たれ弱いんだ、ガラスのハートなんだよ」

そうでなくても、俺と玖百合の関係性についてまあまあ噂にな

ってるんだ。なんとか兄と妹で通してるけれど、玖百合のバカな発言の所為でそれも危うい。えんまのガキは玖百合の友達で通せるが……。ええい、くそ！ 何でこんなことで頭を悩ませなければならぬんだ。

無性に腹が立って玖百合の綺麗に別れた黒白頭をわしゃわしゃと掻き混ぜる。

「ぬ？ ぬ！？ な、何をするんだぬ齒車！ 女の命とも言われる髪に」

「トリートメントのトの字も知らなかった奴が何を言ってるんだ。一万年も放置してたじゃねえか」

「それは私のせいじゃないぬ！」

「そうじゃ齒車、責めてやるでない。玖百合とておなご。一万年もの間髪をほっつておいたことを、最も悔いておるのは玖百合じゃろっつて」

「ぬ？ いや、それは別に……。髪なんてむしってもすぐ生えてくるしぬ。ほら」

そう言っつて、ぶちぶちぶちいっと自分の髪をむしりとった。

「な、な、なにをしておる！！ そんなこと……」

によきっ。

「生えたばかりは何だか痒いぬ」

「……歯車よ、玖百合の髪は鮫の歯か何かなのかの」

「こんなトンデモちゃんを常識ではかろうとするな。つーか、お前だって出来ない事はないだろ……」

「何を言うか、常識は日常において不可欠なのじゃ。大衆との共通意識がないと社会に出てから痛い目にあうのじゃぞ」

「お前、老成し過ぎだよ……」

いや年齢的には、もはや年寄りって次元じゃないのは確かだが。

しかし、常識か。言われてみると納得させられる。よく考えたら実質五歳、バカみたいに壮大な黒歴史があるから忘れがちだが、保育園や幼稚園にいる年だ、常識何ぞ持ち合わせているはずもなかった。もしかしてこんなアホなこいつも、世間の荒波に投げ込まれば常識を身につけるじゃないのか？ そうすると、俺も世話が楽になるんじゃないのか？ みんなハッピー大団円になるんじゃないのか？ よし。

俺は手をパンと叩いて言った。

「玖百合、学校に通え」

『よし、人類殺そう』

いつだったか、世界が汚泥に塗れていると自覚したのは。

いつだったか、人間は腐食しきっていると認識したのは。

いつだったか、生命の矮小さを悟ったのは。

いつだったか、自分さえも世界の一部と理解したのは。

いつからだったか、汚れた世界を憎むようになったのは。

いつからだったか、汚れた自分を抹消したいと思うようになったのは。

全てを零に帰そうと、何もかも無に戻そうと、あまねく生命を死に沈めようと、そう決めたのはいつだったか。

いつのまにか人を殺していた。いつのまにか人を沢山殺していた。気付いたら死体の山に上っていた。

辺りを見回しても自分以外存在しない一の空間。けれどもダメだ。自分がいる自分がいる自分がある。いらぬ自分がある。そして世界にはまだまだいらぬ人間がある。零がいいんだ。零でなくてはならないんだ。だから殺そう、目につく人間を視界に入った人間を鼓動する人間を世界にいる全ての人間を。殺そう。一人として逃さず、一人として見逃さず。殺そう。殺そう。殺そう。

そして全ての人間を消し去った後で滅ぼした後で殺し着くした後

で僕も死んで 零にする。それできつと世界は喜んでくれる。

天に篠付くような高層ビルの屋上で彼は、『零鏡』の教主はとて
も憂鬱そうにそれこそ世界が終つてしまふんじゃないかと思わせら
れるくらい、信者が見たら心配しすぎて死んでしまふんじゃないか
と思うくらいのため息を吐く。そして、ぼそりと呟いた。

「……なんでみんな生きているんだろう？」

彼は世を厭うようにため息を吐きひそりと呟いた。

「……なんでみんな死なないんだろう？」

不満を息とともに外へと排出し彼は悩ましげに呟いた。

「みんなみんな生きていたつてしょうがないじゃないか。世界を汚
すだけで何の役にも立たない、負の要素の塊みたいなもんだ。生き
ていることに罪悪感とか抱かないのかなあ？ 生まれてきたことを
申し訳なく思わないのかなあ？ 一刻も早く死にたくならないのか
なあ？ とりあえず手首とか頸動脈とか切ってみたくならないのか
なあ？ 不思議だなあ？ なんてかなあ？」

ため息、呟く。

「死んでくれないのかなあ？ 別に死んでくれるだけでいいんだけ
どなあ。みんなここから飛び降りてくれないかなあ……。本当なら
出来るだけ苦しんで欲しいところを我慢してるんだから、そこらへ
ん慮ってくれないもんかな。全くみんな空気読めてないよなあ。な
つてない、なつてないよ人類」

肺に入れた空気を二酸化炭素に変えて吐きだし独り呟いた。

「……うーん、やっぱり僕が殺さなくちゃだめか。みんなが勝手に死んでくれれば一番だけど、夢はただ待ってるだけじゃ叶わないよね。努力しなくっちゃ」

そして彼は宣言した。

「よし、人類殺そう」

『否定する』

心にはただひたすら世界に対する憎しみがあつた。理由も動機もきつかけも見当たらないがただただ世界が憎らしかつた。意味もなく破壊したかつた。訳もなく滅ぼしたかつた。とめどなく殺したかつた。世界に対する憎悪が溢れて止まらなかつた。

彼にとつての世界は、最初は人間という存在だつた。周囲の人間が煩わしくて汚らわしくつて嫌で嫌で仕方がなくて、むやみやたらに殺しまわつた。彼はいつだつて核爆弾のスイッチが手元にあることを夢見ていた。ただしかしそれでは人間は消えないのだという事がある日知つた。逆列の頂点にあつて知つた。そして、人間が下等種族にすいない事も知つた。最も手を抜いて作られた作品でしかないことを知つた。

世界にはあまりに憎悪すべき対象がいて、どんなに頑張つても独りで世界を殺すことはできないことを悟つた。

だから彼は零鏡を作つた。まずは人間からと教主となつた。

そして彼は反逆を宣言した。

しかし、彼の前には神が立ち塞がつた。

高慢に傲慢に、ただ八当たりがしたいというためだけに、彼の心からの願いを懇願を台無しにしにやつてきた。

見た目はただの子供にすぎない、けれども人間と神の間には覆すことのできない差がある。ただそのいるだけで圧倒され、そこにあるだけで呑みこまれる。心が勝手に傳くのだ、跪け頭を垂れると本能がそう叫ぶのだ。それこそが世界の理不尽、これこそが世代の差。神の傑作と、片手間の作品との差。

「なあ、人間。僕にとつてお前らは空気中の塵以下の存在だ。何を思つていようと何を考えていようとどんな行動をしようと、興味な

んでない関心なんてわからない。だから、お前が世界を憎もうとも人間を殺そうとも気になりはしない」

真つ白だった空間は今ではもう信者の血と肉で上から赤く塗りつぶされている。そこに息づくのは二つだけ。第一世代の長と零鏡の教主だけが残っていた。

教主は深い深いため息を吐きたい気持ちでいっぱいだった。百人以上いた生贄どもが、この小さな少年の一言で弾けとんだ。

無茶苦茶だ。こんなにも世代による差があるのならば、何故人間は作られた。絶対的な強者の一言で簡単に消えてしまうような儂い存在をなぜ生み出した。最初からいなければよかった。人間など作り出されなければよかった。そうすれば自分はこんなにも憎悪を抱かなくて済んだというのに。

憎悪。自らの心を表現するならば、その二文字で事足りる。人間が憎くて、妖精が憎くて、天使が憎くて、悪魔が憎くて、龍が憎くて、神が憎くて、世界が憎かった。だから、彼らに頼った。世界に反逆することを宣言した彼らに。

自分はここで死ぬだろう。全ては計画通りに遂行している。問題はない。ここまでの大物が来るとは思っていなかったが、あの白い龍にまた襲撃されるよりはましな方だ。

神は彼が自分の言葉など聞いてないとは露とも考えず、朗々としゃべり続ける。

「けれどもお前らは、僕らまで標的に入れたな？ 下等種族の分際で、過ぎた願いを持ったな？ 失敗作風情はそんな思いを抱くだけで罪だ。自分たちが生き延びさせてもらっているだけだという事を忘れたか？ お前らは、僕の気まぐれで滅びることを忘れたか？」

本当に得意げにそういう神を見て、教主はこの化物の精神年齢が見た目通りであることを悟った。蟻を踏みつぶすことに優越感を覚えるよな童子と大差ないのだと。いつから生きているのか、いつななったら死ぬのかも分からないでたらめな存在の精神がこの程度だと知って酷くおかしくなった。そして、嬉しくなった。

これならどうとでもなる。これが世界の頂点ならば、世界はとんだ無能。

教主は表情を変えず狂った思考に浸っていた。これから殺されるにも関わらず、心は狂喜で一杯だった。

「僕はお前を否定してやる。大海を夢見た蛙は潰れて死ね。 否
定する、世界よこいつを肉片に変えろ」

破裂音が響いてそこには神だけが残った。

神は最後に見たのは教主の満面の笑みだった。

『教師が変態だったぬ!』

どもども、世代を超える魅惑のミスティアスガール玖百合だぬ。今日もみなさん私にメロメロかぬ? いやいや分かつてるぬ分かつてるぬ。言葉に出すまでもないぬ。呼吸してますか? と聞くようなもんだったぬ。

さて、話は変わるが。私はこの度学校とやらに入学することになったぬ。

「はい、みんなー。今日から一緒にお勉強する棚月玖百合ちゃんよ。仲良くしてねー」

教室というらしい場所に三十個ほどの机が並べられ、子供たちの視線が私に集中する。ふむふむとわ私はその視線に込められた感情を感じ取りうなずく。どうやらもう私の魅力にあてられてしまったらしい。嬉しくはあるが困ったもんだぬ。私にはもう歯車という夫がいる。歯車に操をたてている私にはこの視線に応えることはできないぬ。こう見えても、私は一途なんだぬ。後を引くのは面倒だからぬ、ここでびびっと言ってやらなくては。

「じゃあ玖百合ちゃん、簡単でいいから自己紹介してもらえるかな?」

「ぬ。私は棚月玖百合だぬ。まず言っておくが、私には夫がいるぬ。歯車と言って情けない、私がないと何もできない困った奴だが、やるべきことはちゃんとする一本筋の通った男だぬ。だから、お前たちのその感情にはこたえられない、すまんぬ」

そう言っ頭を下げ 上げると、なぜか全員がぼかんとしていた。きつとあまりのショックに反応もできないぬ。うぬうぬ。きつとこの挫折がお前たちを強い子へと導く一つの糧となるんだぬ。精進するがいいぬ。

そう世界の未来は君たちの成長にかかっているんだぬ！！

「分かりやすい問題児だわ……。教師生活三年目にしてようやくクラスを任されたっていうのに……。はあ。よく考えたらおかしな話だったのよね、教頭も校長も普段より一層禿散らかっていたし。あの分かりやすいサインを見逃さなければ……。！」

ぬぬ……。！？ 何故か教師までもがショックを受けたような顔してるぬ。ま、まさか……。！

この女、変態だぬ！

気づいてしまった驚愕の事実。思わず後ずさるぬ。

時間軸をいじってこの場所を固定した後、歯車から渡されていたコードを使う。すると、いわゆるどこでも行けちゃうぞドアが出現し、番号を押して開くぬ。ぬ？ 違ったぬ何か白い龍が水浴びしてるぬ。

『なっ！？ 大罪 』

ぱたん。

……。これがお風呂を除いてキヤーエッチ。ふぬ、また一つ大人になっちゃったぬ。

あの無邪気な時代を懐かしみつつ、3と8を間違うという初歩的なミスに気付き正しい番号に直す。ガチャリと開けばそこにはアザラシのようにソファアールの上で寝そべる歯車がいたぬ。

ぬぬ、なんたるなまけよう。こんなことでは今に残念体型になってしまうにちがいないぬ。これだから二トは……。

はふうと溜息をつく。我が養っていかなければならないぬ。

悲壮な決意を固めた我は、タオルを歯車の顔にかぶせその上から熱湯をちやっとかける。

「あつうっ!？」

おお、飛び上がったぬ。

「な、なんだ？ ……タオル？ 玖百合!？ 何でお前ここに居るんだよ！ まだ学校に行っている時間だろうが。つつか、このやけに熱いタオルはなんだ。そして、その手に持っているやかんはなんだ？ いや、別に言わなくてもわかるけど、せめて冷たいタオルにしておけよ。この譲歩もおかしいけど……」

「そのタオルが我の良心だぬ」

「薄くて軽い良心だな!？」

「肌触りもいいぬ」

「知らねえよ!?!」

ふぬ、まったくよくわからないけど沸点の低い奴だぬ。まいいぬ、歯車がいかに器が小さい男だろうと黙って受け止めるのが良い女だぬ。

「で、何でお前はこんな時間に帰ってきてんだ？ いきなりサボリか？」

「我は公明正大にして弱肉強食の玖百合ちゃんだぬ。そんな浅はかな行動をとるわけがないぬ。見くびってもらっちゃ困るぬ」

「……まあ、意味なんて分かってねえんだろってつつこみはしないでおいてやるよ。じゃあ、なんでここにいんだ？」

「教師が変態だったため！ このままでは、麗しき私のピンチ！ 故に、歯車に殲滅する許可をもらいに来たぬ！」

「はあ？ お前の担任、たしか若い女だったろうが、しかも結構真面目そうな。よくわかんねえこと言ってるないで、さっさと戻れ　ん？　電話か……シロ？」

ぬ？　こら歯車、我と話している時に電話に出るとは何たる暴挙。お前は我だけを見ていればいいぬ。……いや、見るとは言ったがそんなに睨まれると……ドキドキするぬ。

「……分かった、そっちに寄越すから好きなようにしてくれ」

電話を切った歯車は、おいでおいでと我を呼ぶ。ふぬ、分かっているぬ。何となく嫌な予感を、こつ私の第六感がひしひしと感じ取っているぬ頭の中では警鐘が鳴り響いているぬ。しかし、その手招

きには抵抗するすべを我は知らない。

おずおずと近づく我。がしりと頭を鷲掴みにされる我。やっぱりだぬ……。

再度出現したどこでも行けちゃうぞドア。カチカチと歯車は番号を合わせているぬ。

「怖い怖い龍の女王様からお呼び出しだぞ玖百合。学校用にリミッターつけたまんまだから、逃げられもしいと思っけど、多分死にはしないからがんばってこい。どうやら、まだまだ乙女らしいからな。学校には俺から言っというてやる」

ガチャリと開かれたそのすぐ先には、白い女がいたぬ。

ぽいっと投げられて、がしっとキャッチ。

パタンと扉が閉まって、我の逃亡劇が幕を開けたぬ。

「ぬぬぬー！！」

「遅いわ大罪っ！」

……閉じたぬ。

『あー、腹減ったなあ』

ここは世界の落とし穴 『奈落』。

殺すことすら生温い悪辣極まりない罪を犯した者たちを死ぬまで幽閉する世界の最奥。ここに光は届かない、ここに希望は存在しない、犯罪者だけがいる最悪の掃き溜め。

しかし、そこには今一つの存在だけがあった。生きているのはそれだけで、他には何もなかった。死体もその痕跡すらも綺麗になくなっていた。

それは、第三世代の長にして『世界法』を破るといふ禁忌を犯した世紀の大犯罪者、『墮落白色』。血を好み、争いを求め、力に心酔する狂戦士。彼の後には死体すら残らない、全てを食らう悪食でもある。

「あー、腹減ったなあ。最初にすぐ喰わなけりゃよかったぜ。千年てのはこんなになげえとはなあ、誤算だったぜ。やつぱなんかしてねえと遅く感じるもんなんだろうなあ。昔は、殺してりゃあ直ぐに千年なんて経ってたのによ。つーか、今いつたい何年目なんだ？ 『真白』のやろう、せめてそれぐらい教えろってんだー！」

怒りにまかせて火を吹くと、光の届かない世界が照らされる。かなりの熱量を持つ炎は、彼の周囲を溶かすほどではあったが『奈落』全てを照らすにはまるで足りなかった。それが彼を一層苛立たせた。

進んでも進んでも終わりのない世界、壊そうとしても壊れない世界。飢えを満たそうにもここに落とされるほどの犯罪者はそうそう

現れず、そして彼を満足させるほどの実力者いままでひとりもいなかった。

落とした相手に対する怒りはなかった。ただ、彼には飢えがあつて、戦闘と言う甘美な食事を求めていた。

戦いは食事だった。戦争は御馳走だった。そんな彼にとってこの場所は、故郷以上に地獄だった。

「あのガキは最高だったなあ。殴つても殴つてもてんで死にはしねえ、殺そうとしても殺せなかった。逆にこつちが死にかけちゃった。あれは最高だった。今までの全てが馬鹿みてえに味気なく感じちゃった。つまたやりてえなあ。殺してみてえ、殺されてみてえ」

歪んだ思想。反省なんてしていない。間違っていたとは思っていない。だからこそこの場所に居るのだ。終わってしまった犯罪者だからこそ、ここに捨てられるのだ。

しかし、この世界にはハイエナがいる。ゴミ捨て場に捨てられたものであると、見限られたものであると、何であるかと利用し利益を生み出そうとする輩がいる。

「でしたら、殺してたらよいのでは？」

響くその声は、『墮落白色』の背後から。何もいなかったはずの背後から。殺しきつたはずの『奈落』から。

振り向けば人間がいた。青い外套を羽織り、青い杖を持ち、青い眼で彼を見ていた。

「殺せばいいのです。あなたが殺したいと思った相手を。殺したいと感じた相手を。その感情の赴くままに、本能に身を任せて、欲望に忠実になって、殺しまわれればいいのです」

朗々と言葉を紡ぐその声は、彼に興味を持たせるには十分だった。そして、殺意を抱かせるには十分だった。

拳を思い切り振りかぶる。久しぶりの獲物に心震わせ、血沸き肉躍った。けれども、獲物が自ら自分の首へと杖を突き刺したことで彼の戦意は消えうせる。青い獲物からは血が吹き出なかった。表情に苦痛は表れなかった。それは人形でしかなかった。

「ちっ、くそが偽物かよ。ふざけやがって、ようやく血が見れると思ったつてのによ！ ちゃんと生身で来いよ、ぶっ殺してやるから」

「こちらとしても、あなたのような出鱈目な存在に何の策もなく会いに来るなんて無謀なことはしませんよ。これは、魔力でかたどった分身に過ぎません。あなたの欲求を満たすには到底足りないですよ」

「分かってるなら、さっさと消えやがれ。こちらら腹へって気が立ってんだ、無駄な力は使いたくねえが燃やすぞ」

「それは勘弁してもらいたいですね。ここに来るとなっては結構な魔力が必要でしたから、無駄足にはしたくありません。それにこれから話すことはあなたにとっても、十分価値のあることだと思いませんよ？」

「……話してみる」

どうせ暇なのだからと、彼は不承不承話を聞く態度をとった。

「ありがとうございます。とはいっても、話は簡単です。あなたに第一世代の長との戦いを提供する代わりに」

「乗った」

返事は迅速だった。最後まで聞き終わる前に彼の心は決まっていた。あれともう一度戦えるなら、あれともう一度殺し合えるなら、他には何もいらなかった。

その対応に少し呆気にとられた相手は、けれどもすぐに取り繕い笑顔を作る。

「これほど早く了承していただけるとは少し驚きです。しかし、まだこちらの要求内容を言っていないませんが、それはどのような内容でも問題ないと受け取っても構わないという事ですね？」

「ああ、なんでもいい。全ての要求を呑んでやろう」

「分かりました。では、ここから抜け出す手配を済ましてからまた来ます」

そう言つと、青いそれは揺らぎ、輪郭がぼやけ、だんだんと薄くなっていく。消える直前、彼は今思い出したかのように言つて。

「ああ、すいません。自己紹介がまだでした。僕は『原始の青』。『反逆序列』の一位と第七世代の長をやっています。以後、よろしくお願いしますね」

消えた。

『このくそがきがぁッ!!』

最古の種族、世界が最初に生み出した最も優れた至高の第一世代
『神』。彼らは彼女らは、例外を除き唯一世界に働きかけることができる。世界に直接願いをかなえてもらう事が出来る。ただそれには数々の制約が存在し面倒な禁止事項とやらがいくつもあるの
で、神族の殆どがその長い長い生涯で一度も使ったことがないというのが実情だ。あらゆる面で他の世代より優れているため使う必要性がないとも言えるだろう。

神々の住まう、人間界とは時空を異にする『空峰山』そらみねやまの頂上にそびえたつ宮殿『月』。『月』に入れるのは例え神族でも限りなく頂点に近いものだけであつて、ほとんどは入ることができない。神族と言つてもやはり能力に優劣は存在するし、ほぼ不老不死の一族のため身体能力の衰えというものが存在せず単純に長く生き経験を積んできたものが優れているという事になる。外見はなぜか十歳未満で成長を止めてしまい、一部の変質的な至高の持ち虫にはさすがに受けが良いというのはこの物語には何の関係もない話である。

そしてその『月』の最上階の無駄に絢爛豪華な部屋には、果物のかすや食べ終わったお菓子の袋、そしてそれらに囲まれるようにして金色の髪と金色の瞳を持つ幼い少年が漫画本片手にだらけきつていた。これこそがだらけ方のお手本であるかのように、基本に忠実なだらけ方をする少年は読み終わったのか飽きたのか、漫画本を遠くへと放り投げ自分を囲むゴミに目を向ける。

「あー、なんかいつの間にか汚れたなー。大体何でお菓子って食べ終わると袋だけ残るんだ？」

脳みそまでだらけきつたのか、少年はあほなことを言い出す。ちなみに世界で一番世界に近いと言われる種族の長である。少年より強い奴とかはほぼ存在しなかったりもする。一人で地獄を制圧したり、人間界を消したりなんかするのもお茶の子さいさいだったりもする。

そんな莫大な力と反比例するように幼い主の姿を見て、入口の前で呆気にとられたように立つ執事服を着た老人は少し経ってから一つため息を吐いた。彼は神族の中でも最も少年に近い位置に存在し神界においてすべての裁量を任される権力者であった。少年がほとんど姿を現さない神界において、今では若い世代に彼が長だと認識されている。そして恐れられたいた。多くの戦争であまたの敵を、恐らくは主である少年より殺してきたことは間違いない。勿論少年が全ての戦いに顔を出していれば違っただろうが、その場合は戦いではなくただのホロコーストになっていただろう。

『七害』はその力を戦争のような大規模戦闘で使用することを禁じられている。彼らの力はまさに反則であり、彼らが一人どちらかの勢力に与すれば反対勢力の負けはその時点で決定するからだ。

過去、一度だけ『七害』がどちらの勢力にもいるという馬鹿げた事態に至る戦争がおきたが、仕掛けた側である『墮落白色』が世界の落とし穴である『奈落』に千年幽閉される罰を受けた。ここで、だらける少年も両腕を切り落とされ能力を百年封じられた。勿論これは公表されていないため、表向き地獄側の和解案を神界が呑んだ形になってはいるが。眼の前でそれを見ていた老人は、今となってもその恐怖が忘れられなかった。

だからこそこで主に苦言を呈しておかなければと、最上階に位置する『新月の間』へとやってきたのだが、あまりのだらけ様に言

葉を失っていた。頭痛に耐えるかのように眉間を抑えた手を、何かを振り払うかのようにぶんと振って歩を進める。眼の前までやってきたことでようやく少年は老人を見上げ、露骨にいやな顔をした。

「何か用？」

「今から、私は主であるあなた様に一時間ほど小言を言わせてもらいますが、なにかご弁解はございますかな？」

「……勢いでやった、反省はしてない」

「ほう、どうやら小言から説教へと変更してほしいようですね。私めは忠実なるあなた様のしもべ、ご要求には精一杯の誠意をお見せるつもりですぞ。このくそがきがあつ！！」

「ひうつ！？ ま、待て待て待て！ 僕はこう見えてもお前のご主人様だぞ！？ 偉いんだぞ！？ そんな口のきき方していいと思っ
ているのか！？」

「黙らつしゃい！！ 馬鹿な主を正しき道にジャーマンスープレックスで矯正してやるのも従僕の務め！！ いたずらに世界に働きかけるなどという愚行を犯したくそがきにはコブラツイストも追加してやるのではないか。御覚悟よろしいな？」

「誰が覚悟なんざするかじじい！！ 同族でお前ぐらいになると流石に否定できないけど、その程度のハンデで僕に勝てると思うか。ご主人様に歯向かった罪は重いぞ」

「私は教育係。法典にはあなた様を教育するという名目でのみ使える『世界法』が追加されていることをお忘れか」

「ず、ずるいつ！ 卑怯だぞ、『真白』に頼むなんて」

「はっはっはー、聞こえませぬ聞こえませぬそのような戯言！
私の愛のプロレス技、その全てを御身に刻ませてもらいますぞ！！」

その後、みっちりと言教を食らった少年は悔し涙を流しながら
家出を決意した。

『ぎりぎりが楽しいんだよ』

ガチャリとドアを開けて出てきた青い外套を羽織り青い杖を持つ彼は、待ち構えていた同じように青い彼の中へと戻っていった。多くの魔力を注いで作った分身が無事戻ってきた事に彼は安堵して一つ息を吐く。

実際のところ、あんな場所に耐えうるような分身を作り出すには例え彼であっても、半分の魔力などでは到底足りはしなかった。ゆえにあのまま「あの戦闘狂に壊されていれば彼にとって大きな損害となる事は間違えなく、今後の計画においてもかなりの支障を与えうる事は簡単に予想できた。

「まあ、結果として何も問題なく終わったのですから、取りあえずは良しとしておきますか」

しかし、実際のところ随分と分の悪い賭けだった。あの戦闘狂が少しの気まぐれを起こせばすぐに崩れるような薄氷を踏むようなギャンブルだったのだ。

通常なら勝算八割でたたらを踏む彼にとっては、愚策の極みともいえる。

そう、自分の後ろにそんな愚策を考える必要性すらない化物がいなければ絶対に行わなかっただろう。

応接間というよりリビングという呼び名が相応しい部屋。一般家庭の範疇に十分収まる、どこにも特別なところのない部屋だった。目の前に居る、彼のパトロンを除けば。

「だから言っただろうが、そんなに心配する必要はねえって。あいつは、戦ってりゃそれで満足できちまう脳味噌まで筋肉の馬鹿野郎なんだからよ。目の前においしそうな人参ぶら下げときゃ、後はなんの文句も言わず一直線にそれに向かって走ってってくれるさ」

「分かっているも恐ろしいものがこの世にはあるんですよ。あなたはどうか知りませんがね。足が竦むのを堪えきった自分に、何かご褒美をあげたいくらいですよ。何なんですか、あの桁違いの圧力は。顔はまるつきりただの鬼でしたし、いきなり火吹きますし。あれだったら、まだ『新月の君』の方が楽ですね。中身はお子様ですから」

「そうか？ 俺としてはガキの方が厄介だけどなー。すぐ泣くし怒るし、外見的にも殴り憎いし。その点、あいつは何の気兼ねなく殴れるからな。かなり楽だ」

「そう言えるのはきつとあなただけですよ……」

世界の例外。唯一の第六世代、『七害』の一角、『真白』。『墮落白色』を『奈落』に叩き込み、『新月の君』の両腕を切り捨て能力を百年封じた世界の寵愛を一身に受ける異端中の異端だ。ただし、面倒くさいのかなんなのか彼が介入するのは本当に手に負えなかった時だけだと暗黙の内に認識されている。

「そんなことはないと思うけどな……。まあいいか、取りあえず手駒として馬鹿を確保できたし、順調な滑り出しだな」

「しかし、あなたが僕達に協力するなんて考えもありませんでした。いつ勘づかれて殺されることびくびくしていたのですが……」

「おいおい、俺はそんな物騒じゃねえって。それに、いくら成長著しい人間でもちよっとレベルに開きがありすぎたからな。何だって、ぎりぎりが楽しいんだよ。勝敗が分からなくなるほど切迫した状況が一番面白いんだ。これぐらい味方したって、何の問題もないさ。こっから先は、お前ら次第だしな」

「ええ、承知しております。もともと、僕らだけで計画していた事です、イレギュラーに頼り切りになる様な事はありません」

「おお、言ってくれるな。期待しているぜ青」

「必ずや、ご期待にこたえて見せましょう」

そうだ、期待に応えてやるさ。

お前の言うとおりに、与えてもらった素晴らしい駒を有用に活用して操って計画を成功させて見せるさ。

その余裕を打ち砕いて、這いつくばらせて、命乞いをさせて、無残に殺してやる。

お前の死も計画の内だ。

おせっきょうというなのぶろれすわざをくらったしょうねんは、くやしなみだをながしながらすてぜりふをはきいえました。おしろをぬけだしじげんなんかもとびこえつつ、はじめてのいえでをけっこうしたのです。

それはしょうねんにとっていちだいいっしんでした。あのくそじじいがないてあやまるまでけっしてかえらないとつよくつよくちかったのです。

しょうねんはどいらかというところ、どろっどろにあまやかされてそだてられたためほとんどおしるをでるようなことはありませんでした。げんだいふうにいうならば、ひきこもりだったのです。にーととってもいいかもしれません。

なのでこのたびのいえではかみさまのせかいではだいいげんなのです。『せいきの』というまくらことばをつけてもいいくらいです。うえからしたへのおおさわぎ。てんやわんやです。

しょうねんのじげんをとびこえるというこつどつは、そういうかくくのあらわれでもあったのです。

それに、じぶんではわかっていないかもしれませんが、しょうねんはかみさまのせかいではますこつとてきなそんざいであるため、じげんをとびこえていなければすぐにつかまっていたことでしょう。はからずもせいかいをえらんでいたのです。しょうねんは、れいがいをのぞけばせかいとっていちばんむすこてきなそんざいであるので、きほんてきにすきかってしてもけっかてきにいいほうこつへとむかうようになっています。

じげんをこえて、てきとうにいきおいまかせにきのおもむくままに、しらないところへとやってきたしょうねん。なんとなくぴりつとせいでんきらしきものをかんじたしょうねんでしたが、そんなことはきにもとめません。

あたりをきよきよるとみまわします。とおくのほうにはこつそ

うびるがみえますが、しょうねんのいるあたりはさびれていて、あ
いもにはじやりがしきつめられていました。

しょうねんはきのみきそのままだとびだしてきたため、とうぜんは
だしです。そのままではあしがちくちくするのでふわふわうかびな
がらふらふらすすんでいきました。

ちょっとさきにはおおきなおおきな、もくせいのもんがありました
た。かみさまのせかいはようふうなのでこういったもんはみかける
ことがありますでした。ないわけではないのですが、ひきこもり
のこうどうはんいにはなかったのです。

ものめずらしげにみあげて、ちかづいて、てをのばしてぺたりと
さわります。びくりとゆれました。

しょうねんはくびをかしげます。もんはひやあせをながします。

すると、じょうくつからしょうねんのうてんめがけて、さきの
とがったきのくいがすごいっはやさでふってきました。しょうねん
はにきづくようすはなく、このままいけばくしぎしとなることはま
ちがえないでしょう。しかし、そこはしょうねんです、くいがあた
るちよくぜんどこからともなくもつれつなかげがふいて、そのきど
うをそらしました。

ざくつと、くいはすれすれにさきり、そのしょうげきでとんでき
たじやりはまたもやとっばつてきなかげにより、しょうねんにあた
ることはありませんでした。ただ、ふいたかげはとなりにつっささ
るくいのそんざいをしらせてくれました。

しょうねんはすこしだけおどろいて、すぐきょうみがなくなつた

のかほりをはらうかのようにてをぶります。

それだけで、くいはぶってきたときよりもはやくとんでいき、とちゅうでそくどにたえきれずばらばらになってじめんにみをしずめました。

もんはだらだとひやあせをながしつつ、えまーじえんしーくるを『ましる』にはうします。まじへるぶみー。

……。ちやくしんきよひされました。もんはぜつぼうしました。

そのごさんじかんほどもんをいじくったしょうねんは、ようやくあきたのかふいつときびすをかえてまたどこかへととんでいきましました。

しょうねんのいえではつづきます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7628e/>

大罪と日常風景

2011年5月5日22時46分発行